

動物たちからの贈りもの

犬や猫などのペットをはじめ、牛や馬などの家畜まで、私たちの身近には多くの動物がいます。また、雄大な自然の中に暮らす野生動物も、動物園で間近に見ることができるという意味で身近な存在といえます。動物と私たちは、さまざまな形で関わって生きています。日本ではそういった動物と人々がどう関わっているのか、動物園とペット事情を通じて紹介します。

動物園の中の命



日本の動物園の変遷

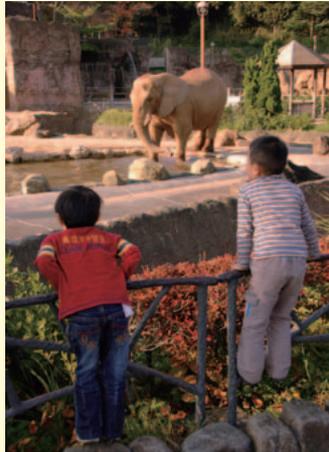


世界の中でも日本は、動物園が多い国のひとつです。現在、日本には100近い動物園があります。最も入場者数の多い上野動物園（東京）には年間350万人が訪れます。

動物園をめぐる賛否両論があります。動物園の野生動物は自然から切り離され、狭い空間に閉じ込められてかわいそうだという批判があります。実際、檻のなかで異常行動をとる動物も少なくありません。しかし一方で、自然破壊が進み、野生動物が帰る自然がなくなってきているという現実があります。動物園は私たちにとってどんな存在なのでしょう。

日本に動物園が一気に増えたのは第2次世界大戦後のことでした。平和のシンボルとして、また子どもたちに夢と元気を与えるために、自治体がこぞって動物園をつくったのです。

その後、珍しい動物がくるたびに話題になりましたが、1990年代に入って、動物園の入園者数は減少し、中には閉鎖に追い込まれる動物園も出てきました。この理由として、少子化や娯楽が多様化したことなどのほかに、動



©TJF

- 1882年** 日本で最初の動物園、上野動物園（東京）が開園
- 1900年代初め** 大阪や京都など大きな都市で動物園が開園
- 1900年代半ば** 第二次世界大戦中、動物園の動物が処分される
- 1948年** 子ども動物園が上野動物園内に併設される
- 1949年** 「ぞう列車」で3万人の子どもたちが東山動物園（愛知県名古屋）を訪れる
- 1950年頃** 上野動物園が各地を巡回する移動動物園を実施し、各地で動物園ブームが起きる
- 1950年代** 動物園が全国各地に開園される
- 1972年** パンダが初来日し、日本中でパンダの大ブームがまきおこる
- 1980年代** 娯楽、教育、環境保護、研究が動物園の大きな役割であることが広く認識される
- 1984年** コアラが初来日し、ブームとなる
- 1990年代初め** 娯楽の多様化、少子化などにより動物園の入園者数が減少
- 2000年代初め** 行動展示を取り入れた旭山動物園が人気を集める

物を檻の中に展示しているだけの動物園に魅力がなくなったことを挙げる人もいます。しかし、この数年、動物園の人气が盛り返してきています。その火付け役となったのは、動物の魅力を引き出すような展示方法を導入した北海道の旭山動物園でした。ほかの動物園でも、魅力的な展示が行われるようになり、動物園は今や子どものための施設から子どもも大人も楽しめる施設へと変わってきています。

子ども動物園

1948年、上野動物園内に、子どもたちが動物に触れる「子ども動物園」ができました。子どもたちに、動物を身近に感じてもらうと共に、命を実感してもらうことがねらいです。現在、7割の動物園に子ども動物園があります。また、公園内に動物たちと触れ合える場所を設けている自治体もあります。このような子ども動物園で多く飼われているのは、ウサギ、モルモット、ヤギなどです。

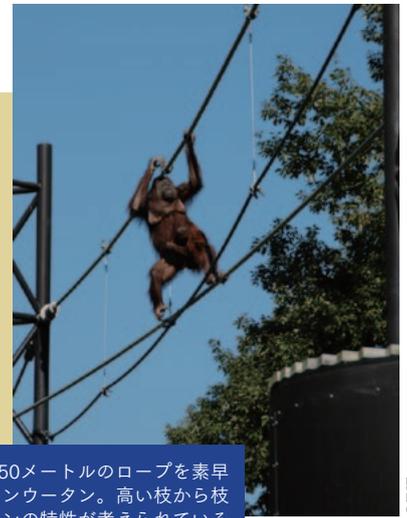


©TJF

子ども動物園は、直接動物に触れることができるので、子どもたちに人気がある

動物園の動物が幸せに暮らすために

単調になりがちな動物園の動物の暮らしを豊かにするために、環境エンリッチメントの研究がされるようになり、いろいろな方法が試されています。動物園でなぜ異常行動をとる動物がいるのでしょうか。その理由のひとつは、することがないからです。野生動物は、餌をとるのに、過酷な自然環境と戦わなければなりません。例えば、ホッキョクグマの一日の活動範囲は何十キロにも及び、一日の大半を餌探しに費やします。しかし、決まった時間に決まった餌を与えられる動物園ではすることがないのです。そこで、餌を得るために少しでも時間と労力が必要になるように、大きな氷のなかにバナナやりんごを入れたり、毎回違う場所に餌を隠したりするなどの工夫をする動物園が増えていきます。



高さ15メートル、全長150メートルのロープを素早く渡る多摩動物園のオランウータン。高い枝から枝を渡り歩くオランウータンの特性が考えられている

©TJF

命を伝える動物園

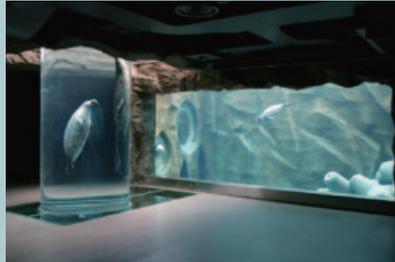
旭山動物園（北海道）がこの数年注目を集めています。旭山動物園は、1967年に開園した日本最北の動物園です。1970年代には70万人近くあった入園者数が、1990年代に25万人まで減少したとき、旭山動物園は「社会的な役割を失った」と

批判されました。小菅園長は、動物園の役割について再考しました。そして、「動物園は、野生動物の命のすごさを感じてもらふ場所ではなくてはいけない」という結論に達したそうです。

命を感じてもらふために、旭山動物園では「行動展示」という新しい展示方法を導入するようになりました。動物を訓練してショーなどをさせなくても、動物はそれぞれに行動も志向も異なり、その個性はとても魅力にあふれています。それぞれの動物の動きを魅力的に見せるよう工夫しているのが行動展示です。例えば、アザラシ館では、円筒状の水槽を勢いよくおよぐアザラシを間近に見ることができます。これは、狭い場所を垂直に泳ぐのを好むアザラシの特性がよくわかるようにしたものです。



ほっきょくぐま館では、透明のカプセルが地面から突き出している。来場者はこのカプセルからホッキョクグマの様子を見て、迫力を感じることができる



円筒状の水槽を真上に向かって泳ぐアザラシ

©旭山動物園

かわいそうなぞう



『かわいそうなぞう』
©文：土屋由岐雄、
絵：武部本一郎
金の星社、1970年

第2次世界大戦中、多くの動物園でたくさんの悲劇が起きました。激化する戦争に伴って、食糧難は深刻化し、多くの動物が栄養不足などで命を落としました。さらに、檻から逃げ出した動物が人間に危害を加えないように、軍部は動物の処分を命令し、ライオン、トラ、ヒョウなどが次々に処分されました。しかし、上野動物園の象2頭は、毒の入った餌を食べようとはせず、生かしてもらうため、そしてちゃんとした餌をもらうためにいろいろな芸をします。『かわいそうなぞう』には、そんな象の姿が描かれています。

戦後、日本で生き残った象は東山動物園の2頭だけでした。象を見たいと熱望した東京の子どもたちは、1頭を上野動物園に貸してほしいと東

山動物園の園長に請願しました。しかし、2頭の結びつきは強く、少しでも引き離そうとすると、象は壁に頭をぶつけ頭から血を流しながら暴れたため、貸すことはできませんでした。そこで、日本各地から東山動物園までの特別列車「ぞう列車」が運行されました。このぞう列車で東山動物園を訪れた子どもたちは3万人以上に上りました。『ぞうれっしゃがやってきた』には、このときのことが描かれています。

この2冊の絵本は、人間の勝手な行動を戒め、動物の命の尊さ、人間が動物に対して果たすべき責任、動物が子供たちに与えてくれるものを教えてくれています。



『ぞうれっしゃがやってきた』
©文：小出隆司、
絵：箕田源二郎
岩崎書店、1983年

『かわいそうなぞう』と『ぞうれっしゃがやってきた』

動物に託した平和への思い

ぞう列車が運行されたものの、すべての子どもたちが東山動物園に行けるわけではなく、上野動物園に象を呼びたいという東京の子どもたちの思いはとても強いものでした(コラム5参照)。この強い思いを知ったインドのネルー首相は、1949年、自分の娘と同じ名前「インディラ」と名づけた象を上野動物園に贈りました。そのときにネルー首相から子供たちへの手紙にはこう書かれていました。

〔前略〕・・・I hope that when the children of India and the children of Japan will grow up, they will serve not only their own great countries, but also the cause of peace and cooperation all over Asia and the world. So you must look upon this elephant, Indira by name, as a messenger of affection and goodwill from the children of India・・・〔後略〕

敗戦後うちひしがれていた時期に、この象は多くの子供たちに希望を与えてくれました。

中国との国交が正常化した1972年には、友好の印として中国からジャイアントパンダ2頭「カンカン」「ランラン」が贈られました。当時、パンダについて何も知らなかった日本人は、その愛くるしい姿が報道されるとたちまちとりこになり、パンダの大ブームが巻き起こりました。初公開のときには、門前で徹夜する人も現れるほどで、開園を待つ人の列は2キロメートルにも達しました。

インドの人たちにとっての象も、中国の人たちにとってのパンダもとても大切なものです。その大切な命を日本に贈ることは簡単なことではなかったでしょう。そのことは日本人たちにも伝わり、どちらの動物も多くの人たちから愛されました。また、動物を通じて、相手の国を身近に感じるようになった人も多くいました。

コンパニオンアニマル



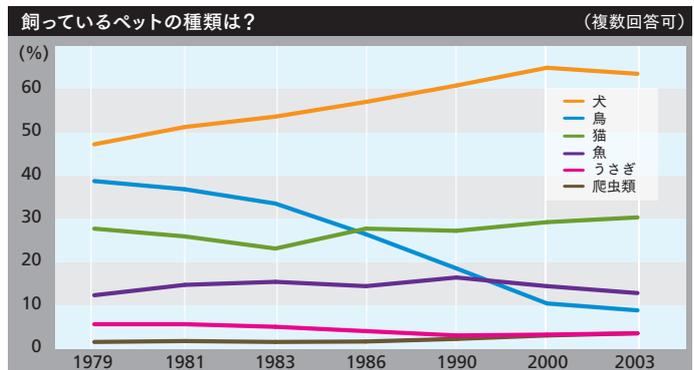
人気の動物

日本では、4割近くでペットを飼っています(内閣府「平成15年 動物愛護に関する世論調査」)。東京や大阪などの大都市よりも、地方のほうがペットを飼っている世帯は多くなっています。飼っているペットの種類は、犬、猫、鳥、うさぎ、ハムスター、魚、爬虫類、昆虫などさまざまですが、とりわけ人気が高いのは犬や猫です。

都市部の集合住宅に暮らす家庭や単身者が室内で犬や猫を飼うケースが最近増えています。10年前、犬や猫の飼育が許可されている集合住宅はほとんどありませんでしたが、現在ではペットを飼うことが認められている集合住宅は5割以上に上ります。また、犬や猫を預けることのできるペットホテル、人とペットがいっしょに利用できるホテルや飲食店も増えています。

犬を家族の一員として地域の人たちに受け入れても

らうために、しつけが必要であるという認識が強くなってきたことから、犬のしつけ教室も多く見られるようになりました。



資料:内閣府「平成15年 動物愛護に関する基本調査」

人気のある犬の種類

資料: 日本: JKC2006年、米国: American Kennel Club2006年、英国: The Kennel Club UK2006年、オーストラリア: Australian National Kennel Council2006年

登録されている犬の種類

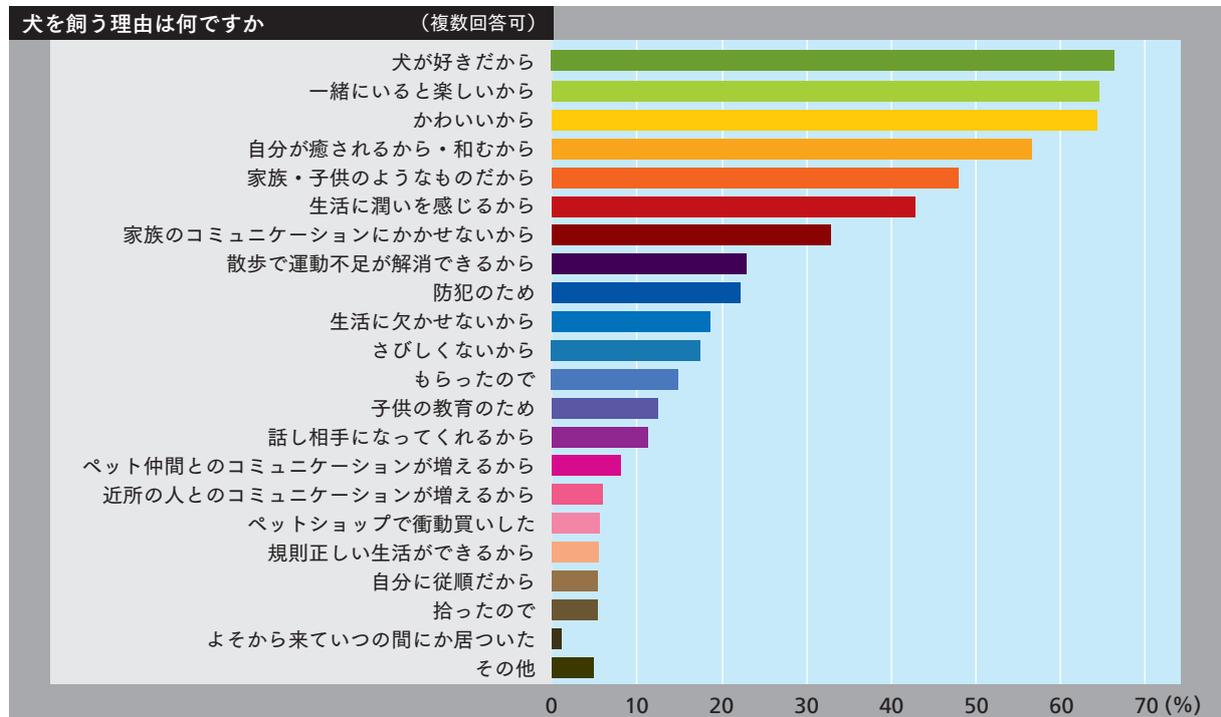
人気のある犬はその年によって変わりますが、近年、日本では小型犬の人気が非常に高いです。あなたや周りの人たちはどんな犬を飼っていますか。それはなぜでしょう。

	日本	米国	英国	オーストラリア
1	ダックスフンド	ラブラドル・リトリバー	ラブラドル・リトリバー	ラブラドル・リトリバー
2	チワワ	ヨークシャー・テリア	コッカー・スパニエル	ジャーマン・シェパードドッグ
3	プードル	ジャーマン・シェパードドッグ	イングリッシュ・スプリング・スパニエル	スタッフォードシャー・ブル・テリア
4	ヨークシャーテリア	ゴールデン・リトリバー	ジャーマン・シェパードドッグ	カバリア・キング・チャールズ・スパニエル
5	パピヨン	ビーグル	スタッフォードシャー・ブル・テリア	ゴールデン・リトリバー
6	ポメラニアン	ダックスフンド	カバリア・キング・チャールズ・スパニエル	プードル
7	シーズー	ボクサー	ゴールデン・リトリバー	ボーダー・コリー
8	ミニチュアシュナウザー	プードル	ウェスト・ハイランド・ホワイト・テリア	パグ
9	ウェルシュ・コーギー	シーズー	ボクサー	ボクサー
10	フレンチ・ブルドッグ	ミニチュアシュナウザー	ボーダー・テリア	コッカー・スパニエル

犬を飼う理由

動物と接することが精神的・身体的にいい影響を与えることは広く知られるようになりました。養護老人ホームなどの介護施設でも動物と触れ合う機会を設けるなど、アニマルセラピーを取り入れるところが多くなりました。

ある調査では、多くの家庭が「子供がせがんだ」ことがペットを飼うきっかけになったと答えています。実際に飼ってみると、家族の会話が増えたり、家族みんなが癒されたりという効用があったと答えています。また、地域のコミュニティが希薄になった都市部では、ペットを通じて、近所の人たちとのコミュニケーションが増えるなど、さまざまな効用があるようです。



資料：ペットフード工業会「2006年度犬猫飼育率全国調査」

野良猫から地域猫へ

犬や猫の飼育数が増える一方、捨てられる犬や猫もいます。野良猫をほうっておかず、餌をやる人がいる一方、庭に糞尿をされるなど被害を受ける人がいて、トラブルにつながったり、臭いなどで住環境が脅かされることが問題になったりすることもしばしばです。野良犬や野良猫は都道府県の動物愛護センターに保護されますが、一定期間引き取り手がない場合は、処分されることとなります。その数は、年間40万匹以上に上ります。

野良猫を処分するのではなく、住環境を守りながら猫の命も守る取り組み、「地域猫」活動に取り組む町が増えてきました。これは、地域の住民が協力して、猫に去勢不妊手術をしたり、決めた時間・場所で餌をやったり、糞尿の片づけをしたりするということです。手術代金に対して補助金を出すなどの支援を行っている自治体もあります。新宿区もそのひとつです。

新宿区保健所では、野良猫の問題を解決するにあたって、まず、野良猫に餌をやる人、野良猫に害をもたらされている人、町会の人などを集めて話し合っ、問題を明らかにして、それをみんなで共有する場を設けています。「野良猫の問題は、実は人間関係の問題であることが多いんです」と新宿保健所の高木優治さんは言います。「いろいろな立場の人たちが情報交換することが野良猫問題を解決する大きな第一歩であり、猫好きな人たちだけでなく町の人たちも巻き込んで活動して初めて、地域猫活動が根づいたこととなります」と言います。こうやって、地域の人たちに認められた猫は、野良猫ではなく、みんなに見守られる地域猫になるのです。



©新宿区保健所

決められた公園の餌場に集まる地域猫

小学校で飼育されている動物

日本の多くの小学校では、ウサギや鶏などの動物を飼っています。以前は、理科の勉強の一環として動物が飼育されていましたが、現在は命の大切さを学ぶことのほうに重点が置かれています。動物の世話をするのは主に飼育係*ですが、全員で飼育する学校もあります。また、クラスでハムスターや金魚などを飼っていることもあります。

* 高学年になると、全員が何らかの係に携わります。飼育係のほかには、環境美化係、放送係、学校新聞係、保健係などがあります。



©TJF

子どもたちは当番で、小学校で飼っている動物の小屋を掃除したり、餌をやったりする

サルから学んだ大切なこと



さき

8歳、小学校2年生
兵庫県在住

山の斜面を利用して40年前に作られた淡路島モンキーセンターでは、180頭の野生のサルを餌付けしています。山で暮らすサルは、朝9時ごろセンターに姿を現し、夕方5時ごろ山に帰って行きます。秋には山に多くの木の実がなるので、サルはセンターには来ません。所長を務める延原さんのこども、さきちゃんは小学校に入るまで、両親が働くこのセンターで一日の大半を過ごしていました。今でも、放課後や夏休みはセンターで過ごします。サルとはすっかり仲良しで、ケンカをするほど心を通わせています。そんなさきちゃんとサルとの触れ合いがテレビでしばしば取り上げられ、心温まるやりとりが多くの人に感動を与えています。今号は、さきちゃんとお母さんと話を聞きました。

Q：いつからサルと遊ぶようになったの？ 何をして遊ぶの？

さき：たぶん1歳ごろから。気がついたらサルと一緒にいた。水かけっこしたり、木の実を探す競争をしたりして遊ぶの。お母さんが隠した木の実を探すんだけど、大体さきが勝つ。だって、お母さんがどこに隠してるのかこっそり見てるから…（笑）。そうやって遊ぶのも楽しいけど、赤ちゃんに餌をやるときがいちばん楽しい。

Q：このサルにはほとんどに名前がついているけれど、区別はできるの？ 誰が名前をつけるの？

さき：うん。ほとんどわかるよ。顔が違うから。赤ちゃんが生まれたら、さきかお母さんかお父さんが名前をつける。さきがつけた名前は、“りぼん”とか“ケーキ”とか。トロロはお母さんがつ



トロロとさきちゃん。トロロと時々ケンカもするが、とても仲がいい。さきちゃんに顔を触られてもトロロは怒らない

けた。自分が名前をつけたサルも、そうじゃないサルも、みんな同じでかわいい。

母：さきは、サルの識別がいちばんよくできます。教えたわけじゃないんですけど、自然にできるようになりました。

Q：今まででいちばんうれしかったことは何？

さき：5歳のときに、生まれたばかりの赤ちゃんを抱っこしたこと。

お母さんザルが赤ちゃんのすぐ斜め後ろにいたんだけど、赤ちゃんがすごくかわいくて、思わず抱っこしたの。

父：そんなことをされたら、母ザルは普通怒るんですよ。母ザルだけじゃなくて、ほかのサルも怒ります。さきは小さいころからサルと一緒にいるし、今もまだ小さいから、「まあ、いいかなあ」と許したんでしょう。さきがやることを大目に見ているなあと思うことはほかにもありますね。

母：赤ちゃんザルを初めて抱っこしたときは、本当にうれしそうでしたね。それから、テレビ番組の撮影をしていたときに、トロロが初めて体を触らせてくれたのもうれしかったようです。そのときの映像を見たら、さきの顔は本当に満足そうです。普通、野生のサルは触らせてくれませんから。

Q：じゃあ、今まででいちばん悲しかったことは？

さき：6歳のとき、おばあちゃんと散歩していたら、メスで50cmぐらいのサルが死んでのを見た。高いところから落ちたか、犬に襲われたんだと思う。お母さんにそのサルを埋めてもらった。すごく悲しかった。それから、7歳のとき、サルの餌になる木の実をお父さんと一緒に探していたときに、サルの頭蓋骨を見つけた。頭蓋骨だけがそこにあった。すごくショックだった。お墓を作ってあげた。

父：そのとき、さきはそんな様子は見せなかったですね。弱いと



©延原利和

生後1週間の赤ちゃんザルを初めて抱っこしたさきちゃん

©TJF

ころを見せるのがいやなのかもしれませんが、強がるどころがあるんです。でも、あとでお墓を作ったりしたのを見ると、やっぱりショックだったんだと思いますよ。私たちがサルの死に遭遇することはあまりないんです。餌場でサルが死ぬことはないから。これまで餌場に来ていたサルがなくなったときに、今はまだ「いないなあ」と思っているだけですが、そのうち、「いなくなる＝死」と



©延原利和

「ボース! ボース!」と呼ぶとサルが集まる。餌やりと水の交換がさきちゃんの仕事だ

この山には奇形のサルが多く、180頭のうち30頭は何らかの障害を持っていて、センターが開所して間もないころ、足が1本もない赤ちゃんザルを抱えた母ザルが常に抱っこしていることに疲れ、木から落としそうになったのを初代所長であるさきちゃんのおじいちゃんが見つけて、コートと名づけて自分の手で育てました。そのコートのことを忘れられないように、コートの像がセンター内に建てられています。

Q：コートのこと知ってる？ 足のないサルもいっぱいいるけど、どう思う？

さき：コートを育てて、おじいちゃんは偉いなあって思う。でも、そのことを知ったとき、お母さんじゃない人に育てられて、ほかのサルと仲良くできるのかなあ、大丈夫かなあって心配した。

ということがわかってくるでしょう。そのとき、どうやって受け入れるのか、乗り越えていくのか。必要なことだと思いますが、少し心配ですね。

父：さきは障害をもったサルを特別視していません。このサルは、障害をもったサルに自然とあわせて、行動範囲やスタイルを変えています。移動するスピードを落としたり…。序列はもちろんあるけれど、弱いものを助ける。切り捨てたり、放置したりしないんです。障害をもったサルも含めて一つの群れ、一つの社会をつくっているんですよ。

Q：サルと毎日接していて何か考えさせられることはある？

さき：ない! だって、これが普通だから。

Q：お父さんやお母さんは、さきちゃんにサルとの触れ合いを通じて何を学んでほしいですか？

父：これを学んでほしいというのはあまりないんです。さきはほかの子どもができないような経験を毎日しているんですが、いいのかどうかはわかりません。でも、悪いことではないかなあと思っています。助け合って生きるということを肌身をもって知っているから。さきは言葉では言わないんですが、さきの行動を見ていたら、いろいろ考えているんだなあと思うことはよくありますね。お墓を作ったのもそうですし、サルの出産に立ち会うことがよくあるんですが、そのときのさきはすごく真剣で、周りが騒がしくしていると、「静かにしてください」って言ったりしますね。

母：私もこれを学んでほしいというのはあまりないんです。自然に学ぼうと思ってます。こちらが教えるようにすると、逆に拒絶してしまいますからね。



©TJF

淡路島モンキーセンター

民家で暴れたり、観光地でバッグを奪ったり人に危害を加えたりする野生ザルが時々ニュースで取り上げられ、野生ザル＝乱暴者というイメージをもっている人も多い。しかし、淡路島モンキーセンターのサルはみなおとなしい。人間が近くに寄っても、こわがることもこわがらせることもない。このセンター内では、餌を勝手にやったり、食べ物を見せたりしないことをルールにしている。サルに餌をやるときは人間が檻に入る。檻のなかで、その場で買った殻付きのピーナツをやることになっている。サルは、檻に入った人間からしか餌をもらえないことがわかっているので、檻の外の人には餌をねだらないのだ。サルがかわいくて、バッグから食べ物を取り出してむやみにやったりすると、頭のいいサルはどこでも誰からでもおいしい餌をもらえるものだと思います、そのうちに人を襲うようになる。和利さんは、「早紀がマスコミで取り上げられ、こういう接し方があることを知ってもらうことで、野生ザルに対する見方が変わればいいなあと思ってます。それから、これがきっかけになって野生ザルがおかれている状況とか、自然と人間のことを考えてもらえればいいと思います

ます」と言う。また、「もともとこのセンターを開所した当時は、サルが農作物に与える被害が深刻で、それを予防するために、1ヵ所で餌付けをしたほうがいだろうという考えでした。でも、本当は野生ザルに対して餌付けなどしないほうがいいんです。だけど、今すぐに野生に戻すことはできません。サルが安心して暮らせる山がないんですから…。いつか、野生のサルに会いに、人間が山に入っていこうにできればいいなあと思ってます」と和利さんは夢を語った。



©TJF

檻の中に入るのは人間。檻の外には、「ほにゅう類 人間」の札がかかっている。